

って包まれ、LⅡはLⅢを包み、LⅠによって包まれているのである。LⅢの色が外表からみえることも多いが、これはつねにLⅠ、LⅡの層を透してきているのであり、直接みることにはできない。LⅠ、LⅡの厚さは部分により異なるので、葉表からの色の濃さは一定していないのである。

第4図は第3図生長点Nから出た⑥をとり出して大きく画いたものである。葉の全長からみると基部 $\frac{1}{10}$ 内外のところおよび $\frac{1}{2}$ 内外の2か所で横断し、その表面観と、横断面図とを画いたもので、一部鳥瞰図とでもいえるものである。

LⅠ分担の表皮は1層の細胞層で、図では他の部分の割には厚く画いてある。表皮は実際には孔辺細胞のみが葉緑体を持ち、他は緑を表現していない。部分によっては表皮のうらうちのようにLⅠ由来の葉肉細胞があることもあり、また、ないところもある(双子葉類ではLⅠは表皮のみ分担形成する)、LⅠ分担の葉肉細胞が形成されていないところでは、LⅡ、LⅢの細胞群が外部から透けてよく見える。また、さらにLⅡの葉肉細胞も葉の表面側に1層しか並べないことが多いのでその部分はまたLⅠ、LⅡの細胞とも1層しか並べないところでは、すなわちLⅢの細胞群の色が外部から比較的良好に見える部分である。

図示したようにLⅠの分担範囲は部分により厚薄があ

り、LⅠ分担の表皮、葉肉細胞は本来遺伝的に緑であっても表皮は葉緑体を表現せず、それが葉肉に位置する時のみ緑を表現するので、表面観では緑の鮮明な条斑となって現われる。LⅡの白細胞群は断面ではちぎれて見えるが、葉基から葉の先近くまでちぎれることなく分布しており、前述のように、LⅠが表皮のみを形成しているところではLⅡ細胞群の色がよく外から見える。LⅢの緑の細胞群は断面ではちぎれているように見えるが、これも葉の芯の部分で、葉基から先近くまでとぎれることなくつづいている。ただ基部では一群となっていたものが、中部から3つに枝分れして、結果からみるとLⅡの細胞群の中にすじとなって枝分れして分布しているのである。

表面観はaの部分はLⅠのみを見ている、bの部分はLⅠを透してLⅡをみている、cはLⅠ、LⅡをとおしてLⅢをみていることになる。断面図ではLⅢは黒くぬったが表面観ではLⅢは斜線であらわし、多少薄色に見えることを示した。(しかし、第3図ではLⅢ緑はすべてLⅠ緑と同様の黒でぬりつぶしたが、注意深く実物を見ると自らその色は異なるはずである。)

②跳け込み縞の1タイプ、③三光縞、これらは起原層の色についてみると、⑥の逆でgGg周縁キメラであるが⑥と異なり2回の突然変異がない限り出現しないので、⑥よりは珍稀なものである。

## 生物学会会員の皆様へ

### 兵庫県のイネ科(竹笹を含む)の標本収集に関するお願い

1990年には県立自然博物館が開館されると聞いております。また、一方では兵庫県植物誌を作ろうという気運が、橋本光政氏、福岡誠行氏を中心として再び出て参りました。この機に多くの分野で、それぞれまず、すでに持っている標本をしらべ、現地調査、標本の作製を続けながら、解明された分野から、その結果を兵庫生物、に発表していき、その積み上げにより少しでも正確な植物誌が作られますことを期待しております。

そこで、甚だ勝手ながら室井緯博士、藤本義昭氏のイネ科標本を中心に、それらを地図に記入しますと、まだまだ盲点がありましたので、皆様方のお力添えにより県下くまなく標本を集めて、来るべき植物誌の内容を少しでも充実させることができればと願って、ここにお願いの文を書いた次第であります。

#### I 標本の備えているべき条件

①イネ科一般については、花、葉、茎、根のついたもの(タケ、ササは1年生で7~9月にとった

茎、葉、できれば花のついたものを2点ずつ)

②採集者名、採集場所(市、町名、標高およそ何m)、採集年月日

③標本は仕上っていて、ナフタリンを入れ、ビニール袋に入れたもの(タケ、ササは乾燥した段階でも結構ですが、②のラベルは必要です)

II 送り先(預り先) 次の何れでも結構です。

①須磨区妙法寺岩山1054-3

藤本 義昭(電話 741-2748)

②西宮市岡田山、聖和大学教育学部

岡村 はた(自宅 842-1284)

III 期間 1987年4月10日~1988年12月1日

IV なお、これらお送りいただいた植物標本は記録後将来、県立自然博物館に収められ、整理され、コンピュータに入れられ、いつでも県民の方々から利用できるようにされる予定です。

(文責・岡村)